

「原発なしで…… 江戸時代の生活に戻るんですか」

大野 弘

ある新聞に『「江戸時代に戻る」覚悟を！』という見だしで次のようなインタビュー記事が載っていた。

——菅首相が「新成長戦略」を掲げているが？

〇〇…経済成長は、必ず環境負荷を増す。また、環境ビジネスもサービス産業も、経済の柱にはなりえない。環境問題を解決して持続可能な社会になるには、経済活動の縮小以外に道はない

また、メディア等で叫ばれている「需要拡大論」は、「浪費拡大論」に他ならない。一時的な効果があっても、より大きな不景気の下地となるのみである。

「持続型発展のための」と銘打った技術開発や研究が、もてはやされている。しかしその可能性を考えると、資源枯渇にせよ、環境問題にせよ、その将来に悲観的にならざるをえないし、問題の先送りでしかない。はっきりと「縮小」を打ち出し、根本的な変化を促さねばならない。

——「江戸時代に戻れ」ということか？

〇〇…あえて「イエス」と答えなければならない事態を迎える、と危惧している。石油・石炭がなくなれば、最終的にはそれしかない。

それを覚悟した上で、いかに軟着陸するかを考えるべきだ。

——縮小社会の雇用はどうなるのか？

〇〇…縮小社会では、企業活動による生産量が減ることになる。これには、ドイツのように労働のタイムシェアリングなどの社会制度の転換が必要である。戦後日本の生産性は、石油エネルギーの助けを借りて 10 倍くらいになっている。石油をどのくらい使うか、物をどのくらい生産するかによるが、ワークシェアリングすれば、現在の労働時間の半分で十分だ。(以下略)

2010年8月

言わずもがなのまえがき

増え続ける世界のエネルギー消費

右に示したのは、エジソンが白熱電灯を発明した頃から、今日までの石油に換算した世界のエネルギー消費量のグラフである。今や 100 億トンを超える量になっている。その間、何回もエネルギー枯渇の危機が喧言されてきたが、いまだに枯渇に直面してはいない。それどころか、原発や自然エネルギーの類いに加えて、地熱、シェールオイルやガス、オイルサンドにメタンハイドレート等々、新しいエネルギー源の開発が盛んに行なわれている。枯渇するか、しないかは、「お金の問題」に過ぎない様相を呈している。

もうすぐ 70 歳に手の届く筆者が生まれた時には 14 億トン、50 歳の人なら 36 億トン、30 歳の人なら 64 億トン、さらに、今 10 歳の子供さんが生まれた時には、91 億トン程度の消費レベルであった。それぞれの年齢の人が生まれた時点と、今日の世界のエネルギー消費量とを平均すれば、おおよそ、その人が、どの程度のエネルギー消費レベルの世界に生きてきたかが、検討がつくというものではないか。ちなみに、70 歳が 64 億トン、50 歳が 75 億トン、30 歳が 89 億トン、10 歳では、100 億トンを越えるエネルギー大量消費の世界で生きてきたというわけである。筆者なら、将来的に考えられている量の半分の量で生きてこられたのである。

とまあ、ついつい、こんなくだらぬ数遊びをしてしまったが、エジソン以前の昔は、どうだったのだろう。いま、「脱原発」が大声で叫ばれる一方で、それに替わるエネルギーを、と羨しくいわれ、新エネルギー開発の必要性が市民権を得ているのが現状である。でも、ちょっと待って、脱原発だけでいいんじゃない、といたい。それも今すぐにでも。

いずれは枯渇する化石燃料は一切使わない、一年経てば、その年に使ったエネルギー資源の量が元に戻る、そんなやり方で自然を利用する一年サイクルのエコな消費社会が、つい一世紀半前まで存在していた。

「原発なしで……!?

江戸時代の生活に戻るんですか」

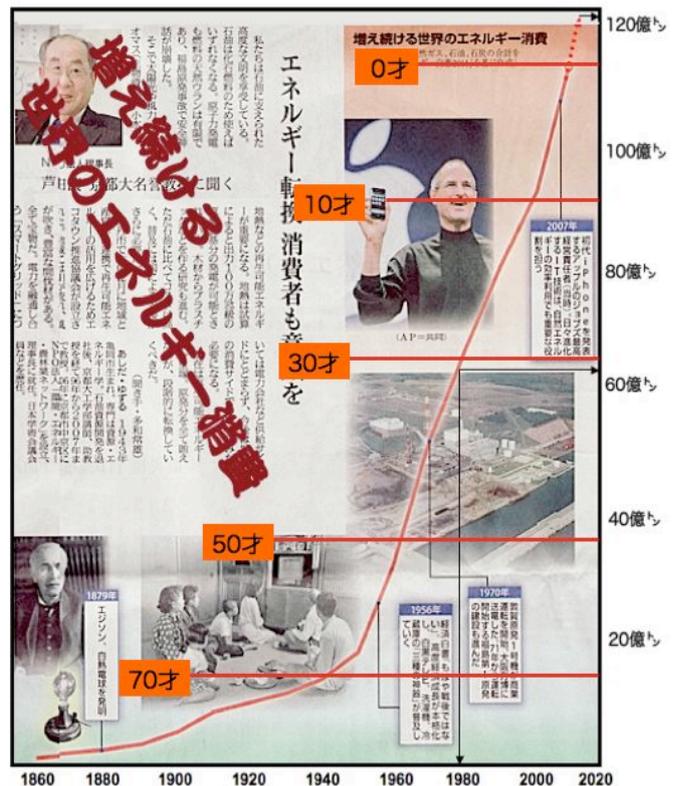
そんな目くじら立てないで、ちょっと江戸の庶民の日々の暮らしや働く姿を、覗いてみませんか。

そこから見えてくるのは、

「もんじゅ」の智恵より **マンパワー** の動力。

ワットの蒸気機関の発明以来、人間はさまざまな動力機械とそれを動かすいくつもの形態の動力源を発明してきた。いまや、身の回りにある機器はすべて電気で動く、オール電化の生活が始まろうとしている。その電気はすべて、原子燃料で生み出され、発電しながら燃料自体をも生み出す夢のようなことも、考えられて来た。これを「もんじゅ」の智恵と云う。

それに引き換え、江戸時代の動力は、基本的には人力であった。馬や牛の力や、水車による水力、帆船などの風力も利用されたが、多くは人の力で何でもした。しんどかったに違いないが、それで出来ることは人間の背丈にあったことだけで、その後始末も容易だっ



増え過ぎる世界のエネルギー消費(石油換算トン)

たし、それなりの面白い工夫もされていた。まねをするのではなく、発想の違いを汲み取ってみたいかがでしょうか。

1 日々の生活

冷房なしで 涼む

冷房が効いた公共施設で過ごしましょう、というのが今年の夏の節電キャンペーンだった。まさか、このおかげで大飯原発を再稼働せずとも、今年の夏が大過なく過ごせたわけではなかろう。私たちは、特に町中に住むものにとって、夏の冷房なしの生活は考えられなくなってしまった。

江戸時代の涼み方ってどんな風だったのだろう。右に掲げた絵は「江戸府内絵本風俗往来」に出ている、夫婦仲良く裸で夕涼みをしている所のスケッチである。陋屋まがいの壁の崩れかけた古家で、軒には日除けのへちマが植わっている。今ならさしずめゴウヤがぶら下がることだろう。オヤジは越中褌で、手酌で冷や酒をチビリチビリ、嫁さんも腰巻き姿、蚊遣りを燃している。その煙は破れすだれを覆うほど燻っている。



兼好法師いわく

『家の作りようは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にもすまる』

家はまず夏向けに風通しがよいように建てるのが、常識だった。現在は、断熱膨張という物理現象を利用した冷房装置を電気で作動させ、閉鎖空間の温度を下げる、という発想が、いつの間にか頭にこびりついてしまった。

冷ではなく涼、すなわち、空気の温度を無理やり下げるのではなく、涼しく感じることをモットーにすれば、どうだろう。

例えば、うちわや扇子であおぐ。実際やってみればすぐ分かることだが、温度計をあおいでも温度は下がらない。でも涼しい。冷房の風は冷たい。電気仕掛けであるにせよ、扇風機の風はまだましである。

右の絵は、電気を使わない扇風機である。6枚のうちわを軸に取り付け、手でハンドルを回す。風は回転軸の方向ではなく、直角に出る仕掛けである。それで、湯上がりの貴婦人は手動扇風機の前ではなく、横に坐って涼んでいる。これは柳亭種彦の「修紫田舎源氏」(1831,天保2年)の歌川国貞の挿絵である。こんな手動扇風機が実際にあったかどうかは、ちょっと疑問であるが。



あおいでも空気の温度が下がらないから、涼しく感じるのは、心理的なものかということ、

そうではない。体の表面付近の空気の温度は37°Cに近い。これを、それより低い温度の周

りの空気で追い払うから、皮膚の表面温度が下がり、涼しく感じるのである。

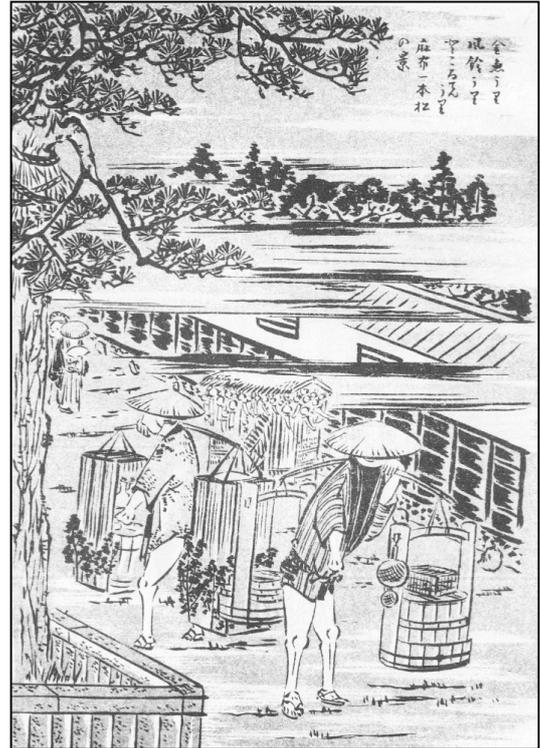
心理的に、これを増幅させる工夫もある。例えば、風鈴。チリンと風鈴の鳴る音を耳にすれば、涼しく感じる。しかし、風鈴の音は、思うようには鳴ってはくれない。夏の台風前後には、リン、リン……と速いテンポで鳴り続け、耳障りなだけである。季節感覚もなく、一年中釣り下げたままの風鈴が、冬の寒風にさらされて、やかましく鳴っていれば、ぞくぞくするだけである。心理的な涼しさを感じるには、それなりの風流心があるし、文化的な壁から、風鈴の音から涼しさを連想できないこともある。

金魚や心太(ところてん)も涼味を誘ったようだ。

「江戸府内絵本風俗往来」の麻布の一本松の景に風鈴・金魚・心太を売り歩く商人の姿が描かれている。

いくら、「夏をむねとした」家に住んでいても、風がぴたりとやんだ蒸し暑い夜ともなれば、冷房の効いた公共施設へ行く変りに、川辺へ涼みにいくことくらいは、庶民にもできた。水温は気温より低いから、水の上をわたって来た風は涼しい。水冷式自然冷房である。昔は、今のようにやたらと、川や水路を埋め立て、暗渠にしなかったから、町のあちこちに水辺があった。

洛中でも、賀茂川と高野川が合流する川州の中には河合社があり、ここを流れる泉川と御手洗川の川縁に川床が並び、茶店で、冷えた甘瓜や心太(トコロテン)、みたらし団子など



を食べさせた。これくらいなら、庶民も「遊宴して炎暑を避くる」ことが出来た。「申樂ありて林間の笛鼓の音さえていと涼し」と都林泉名勝図絵にある。

鴨川四条付近にも中州があって、納涼川床が設けられていた。川岸から仮設の板橋が渡され、料理屋から酒・料理が運ばれ、行灯が立ち並ぶ床は酒宴たけなわ。たなびく雲に濃く影が付けられていて、夜も更けた頃だとしれる。こちらは、女子供はお呼びじゃない、金まわりのいい旦那集の寝苦しい夜のちょっと贅沢な避暑だった。



エジソン以前の 燈火

電灯くらい文明のありがたさを感じさせてくれるものはない。だから、「さあ、たいへん、停電だ」というキャンペーンが嘘でもまかり通るのだ。停電で夜になっても電灯が灯らなかつたり、何の予告もなく電灯がいきなり消えたときの、重苦しい不便さは経験しないと分からない。停電してテレビが見られないくらいは、どうっていうこともないが、夜の暗さはやりきれない。

それでは、江戸時代の人々は、電灯なしでどんな暮らしていたのだろうか。電気を利用するようになって、現代人は、より便利で、より明るくできる装置を次から次へと発明して、自然環境を作り変え、人工的な環境のなかで毎日くらしている。江戸時代の人々の発想は、全く違っていた。人間の都合いいように環境を作り変えるかわりに、自分たちを環境に合わせて生活しようとした。

「早寝早起き」である。これは、個人的な努力だけで出来るものではない。その目的に

合うような社会システムができていた。早寝早起きして太陽光線を十分に利用できるように、暦や時刻の制度を工夫していた。

現代の時制は定時法で、一日中、一時間は同じ長さの一時である。江戸時代の時刻の刻み方は、そうではなかった。不定法、すなわち、昼の一時と夜の一時は、同じ長さではなかった。日の出前の明るくなり始めた時を「明六ツ」、日の入後の薄暗くなり始める頃を「暮六ツ」と定め、その間を六等分した。これが昼間の一時（一刻）で、「暮六ツ」から翌日の「明六ツ」までを六等分したのが、夜の一時である。春分や秋分の日なら、今の2時間と同じ長さであるが、春分から秋分の間は、昼の一時は夜の一時より長く、秋分から翌年の春分の間は、その逆となる勘定である。

「明六ツ」と「暮六ツ」は毎日変化しているから、昼夜の一刻の長さも毎日変化することになる。なんぼ何でも、毎日変えるのは複雑すぎる。十五日おき、節季の代わり目ごとに調整した。

時計もそのように節季ごとに調整し、それに習って時の鐘も毎刻撞き鳴らされた。

このようにして、太陽の明るさに従った自然

のリズムに合わせた生活をしていくうちに、人間の感覚は非常に鋭くなって、行灯のそばで、夜なべもでき、本も読めた（下図「江戸府内絵本風俗往来」）。行灯を50個から100個くらい並べて、やっと60ワットの電球1個の光量しかえられないというが、それでこと足りた。

行灯に使った油は、江戸時代中頃から、菜種油が行き渡り始めた。昨今は、原発事故で放射能汚染が懸念される福島県で、土壌再生のため菜の花を栽培するというが、当時は、種子から油を搾るために咲かされていた油菜である。

『菜の花や 月は東に 日は西に』という句は、江戸時代中期の俳人蕪村の名句である。菜の花は蕪村の時代以前には、歌に詠まれることはなかった。江戸中期になって、压榨技術が飛躍的に発達して油菜は裏作として盛んに栽培されるようになり、菜の花畑は身近な春の景色となった。

『菜の花や和泉河内の小商い』は大阪平野、

『菜の花やみな出ではらし矢橋船』は琵琶湖の南岸、

『なのはなや摩耶を下れば日のくるゝ』は灘付近、そして、

『菜の花や壬生の隠家誰々ぞ』とか、『なのはなや此辺まで大内裏』（召波）

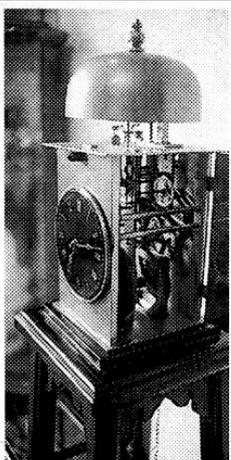
雑記帳

◇一日を昼使。この時計は単に文字盤を替えただけでなく、歯車を分割して十二支で時刻を表す。

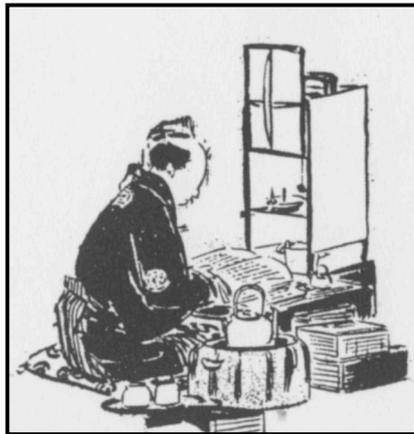
◇修理復元した和時計研 究家の沢田平さん(65)は「24時間制導入の後、リス トラ時代を乗り切ろうとした職人の意地が、時を超えて伝わってきます」。

【伊地知克介】

2000.6.9 毎週



菜の花や月日は東に西に



で、洛中にまで菜の花が植えられていたことがわかる。京都の南の伏見でも、何程の匂に

『菜の花や裏から這入（はい）る撞木町（しゅもくまち）』というのがある。

赤穂浪士の大石良雄が 敵方の目を欺くため、山科の隠棲地から通い遊興したといわれる撞木町遊郭、その裏に菜の花畑が広がっていたのだろう。右の写真は現代の風景である。菜の花畑の向うに酒蔵が見え、撞木町入り口からは、奥にマンションが聳えている。

鯨や魚の油は菜種油より暗くて臭かったが、安かった。点燈用の油は生活必需品であったが、庶民は行商で商う油売りから廉価な魚油を毎日買った。

『<ヘエ油、ヘエあぶらア>と叫ぶ声の聞こえゆるや否、裏長屋の独住、留守をあずかるやからは、油さしを取出し、一合買うあり、五勺もとむありて、日暮れの繁忙おびただしき』（「江戸府内絵本風俗往来」）日暮れから寝るまで4,5勺程（100cc弱）必要だったと云うから、庶民は毎日買っていたことになる。次頁の上の図の北斎漫画の左下には、油売りの姿が描かれている。柄杓から長々と油が糸を引いていて、「油を売る」時間は十分にあった。

京都奉行所は文久3（1863）年、お触れで

『時に乗じ利をはかり、買い占め、値上がり待ちし、自己の利欲をもっぱらにして…』（「都のべからず物語」）と便乗値上げを厳しく咎め、現金売り一升五百八十文を堅く守った3軒の油屋を、奇特の至りである、と銀2枚を送った。ちなみに、菜種油一升の値は、享保年間（1716-36）に200文だったものが、文化年間（1804-18）に340文、天保年間（1830-44）には440文程度まで高騰している。慶応3（1867）年には、2000文と三田村鯨魚はかいているから、幕末の騰貴は凄まじかった。

油を使った行灯は、江戸時代の最も普通の照明だったが、もっと明るい照明が必要な場合もあった。また、夜に外出する際の携帯用照明として、液体の油では、心もとない。そういう場合、蠟燭を使った

原料採取から臘を抽出して、それから蠟燭に仕上げるまで何段階もの工程をへて、手間ひま掛けて製造された和蠟燭は、日常の生活でふんだんに使える代物ではなかった。大広間で使われた100匁蠟燭は、行灯の10倍程の明るさであったが、1本200文もする品物で、米2升分もしたから、日常生活で現れるのは裕福な大名や豪商の生活を描いた絵の中だけである。贅沢の象徴として描かれている場合が多い。

燭台の上に垂れたしずくが固まったものを集めて回る人がいた。「近世風俗志一守貞漫稿」に、『燭の流



れ余るを買集む。風呂敷を負ひ秤を携ふ』とある。魚油や鯨油を混ぜて安もんの蠟燭に再生したり、溶かした蠟を丸や四角の型に入れて固めて売った。これは引戸の滑りをよくするために棧に塗ったり、木製品や廊下の艶出しなどに使った。あるいは、液状になった蠟を紙に塗って蠟紙にし、合羽や傘の防水に使ったりした。再生蠟燭は、提灯など野外で使う場合は、少しくらい臭くても差し支えなかった。庶民はこれで間に合わせた。また、夜の照明などには、臘の搾りかすを混ぜた粗悪品を使った。

現在の私たちの生活では、照明のために石油換算で、一人一年間に 31ℓ 程度であるとし、これは全消費エネルギーの 1 パーセントにも見えないから、電灯をこまめに消すくらいでエネルギーの節約に寄与しないから、気にしないでいいんじゃない、という意見ももつともである。しかし、夜型から昼型に生活パターンを改めることによって、照明以外にもさまざまな面で、エネルギーを節約できるのではないだろうか。例えば、テレビ。

行灯だろうが、蠟燭だろうが、昔の照明も太陽エネルギーを利用している。ただし、去年か、せいぜい一昨年あたりの太陽光で出来たものを、細々と再生している。燃やしてできる二酸化炭素は、また今年の太陽エネルギーで原料に再生される。一年間で収支のバランスが取れている。減りもせず、増えもせずというシステムは経済成長至上の考え方からすれば、これほど愚かなシステムはない。しかし、である。善し悪しはあるにしろ、そうでない太陽エネルギーの利用法をちょっと考えてみてはいかがなものか。

現在の太陽光発電や、風力発電もまた、石油など、枯渇性の化石燃料をふんだんに使って成り立つやり方であることを知っておくべきだ。

部屋でなく体を 温める

「夏をむねとした」家に住んでいては、部屋全体を暖めることは容易じゃないし、それこそエネルギーの無駄使いである。要は、体を暖めればいいのだ。まず、厚着をすることである。それでも、膚が露出した手足などは、冷たい。火鉢で手をあぶり、こたつに足を突っ込んで、腰までふとんにくるまって、下半身を暖めた。江戸時代でなくとも、ごく最近まで普通におこなわれていたことであるが、江戸では、将軍様から下々まで、みな同じであった。お大尽が、金銀をちりばめた火鉢に、特別上等の炭を入れることくらいで、暖かさの程度に差はなかった。



「白木屋阿鞠清書冊子」より



「画本早引」



「教草女房形氣」

部屋全体を暖める暖房装置に近いものとして、囲炉裏があった。これは。暖房だけでなく、さまざまな目的に使えた。火の上の方に素通しの火棚を吊って、食べ物や薪を乾燥させるのに使えた。自在鉤という吊り手にやかんや鍋を自在な高さに吊って、湯を湧かした、煮物をするのも出来た。串刺しにした魚を、火の周りの灰に突き刺して焼いた。火は照明にもなった。囲炉裏端は、一家団欒の場であり、客人を迎えるサロンともなっていた。少々、煙たさを我慢すれば、煙に含まれるタール成分が、屋根の材料である茅やわら縄などにしみ込んで防腐剤となった。

これほど長所の多い囲炉裏も、残念ながら、都会向きではなかった。超過密の木造家屋の長屋には危険過ぎ、据え付けるスペースさえなかった。

江戸時代の人々が室内全体を暖める工夫を本気でしなかった理由は何だったのだろうか。本州以南の冬が大して寒くなかった、体を動かし、働いていれば我慢できる程度の寒さだったからではないだろうか。司馬江漢が寒暖計で冬の寒さを測った記録が残っている。

『予所持する寒暖昇降（計）を以て暑寒を測る。毎年冬の寒十二三分。極寒は八九分なり。』（「春波楼筆記」）

この温度目盛りは列氏ではないかと云われている。列氏とはフランス西部ラ・ロッシュェル出身のド・レオミュール（1683～1757）のことで、100℃を80等分したもの。十二三分といえば、15℃程度、八九分は10℃程度であるから、この程度の寒さでは、確かに寒いとはいえない。『何十年にもなき寒気なり。』と書いている1809（文化6）年でも、1℃強が最低で、凍るほどではなかった。但し、両国川が凍った記録もいくつかあるから、一概にはいえぬにしても、小氷河期ながらも、慣れれば寒くはなかったのでは。

明治時代のジャーナリスト渋川玄耳は、韓国の料亭でオンドルに入った時の感想を、次のように記している。

『長さ四畳半ばかり、小さな窓が一方にあって、薄暗い部屋だ。温突（オンドル）といって床下に火気を通して、五右衛門風呂と同じ理屈の暖室法を設けてある。床は油紙を貼ってすべすべして居る。壁も天井も紙貼りである。何しろ空気の容積が小さいから暖まり易い』（渋川玄耳「日本と世界見物」）

おっ、よさそう。とんでもない、蒸し暑い夏をこんな風通しの悪い部屋で過ごせますか。日本では冬の寒さより夏の蒸し暑さの方がはるかに耐え難い。江戸時代の人々は、焼けても、焼けても、木造の家を建て続けて来た。地震の多い日本で耐火性の石や煉瓦の建物を建てようとしなかった。小さな木造家屋の密集した江戸のような都会では、火鉢とこたつこそ、日本の風土に見合ったもっとも合理的な暖房法だった。

非化石燃料で 煮炊きし 灰を売る

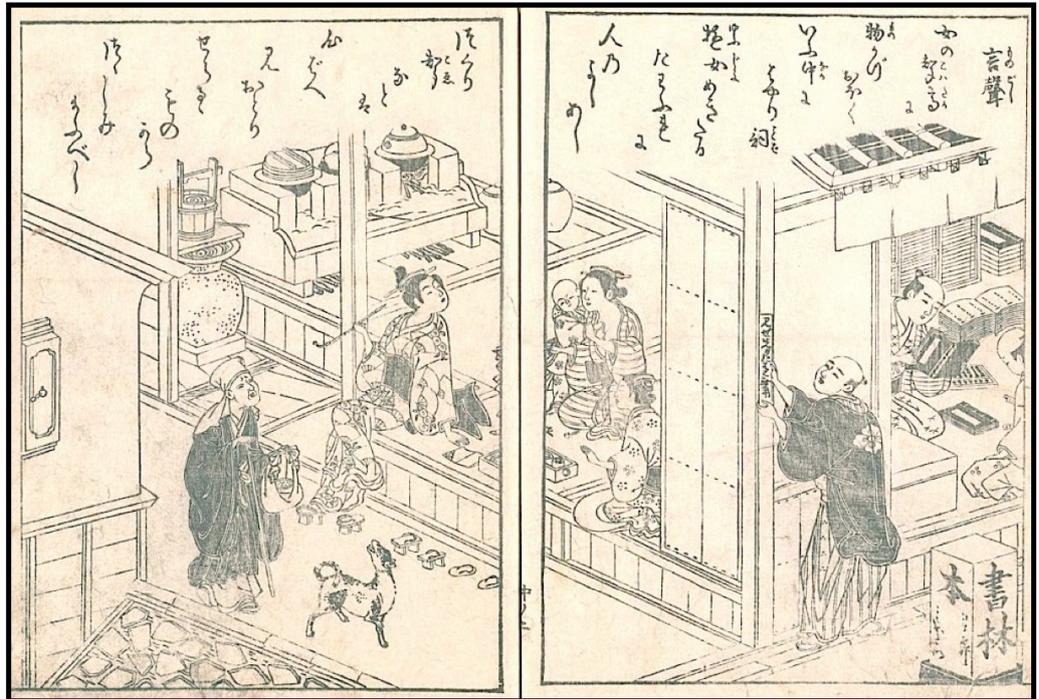
お竈さんや五右衛門風呂に薪をくべた時代はとうの昔に消え、いまは、ガスと電気。それも電気釜が出現して、ご飯を炊くのも電気が使えるようになって、必ずしもガスは必要でない。暖めたり焼いたりするのに、今やオーブントースターや電子レンジが大活躍。電磁調理器の出現で、動作中に発光することはなく、「火」を目にせず料理ができる。しかし、通電状態を示すために電気コンロを模して加熱部周辺が光る機能を持たせたものもあるというから、致せり尽くせりであるが、煤まみれから電磁波まみれの台所となってしまう。

江戸時代は、薪と炭であったとは分かるが、江戸の長屋くらしの庶民が、どのくらい料理をしていたのだろうか、おおいに疑問である。その様子をうかがわせる絵を見つけるこ

とは出来ない。長屋には台所さえなかったのだろう。町家や商家にならあった。

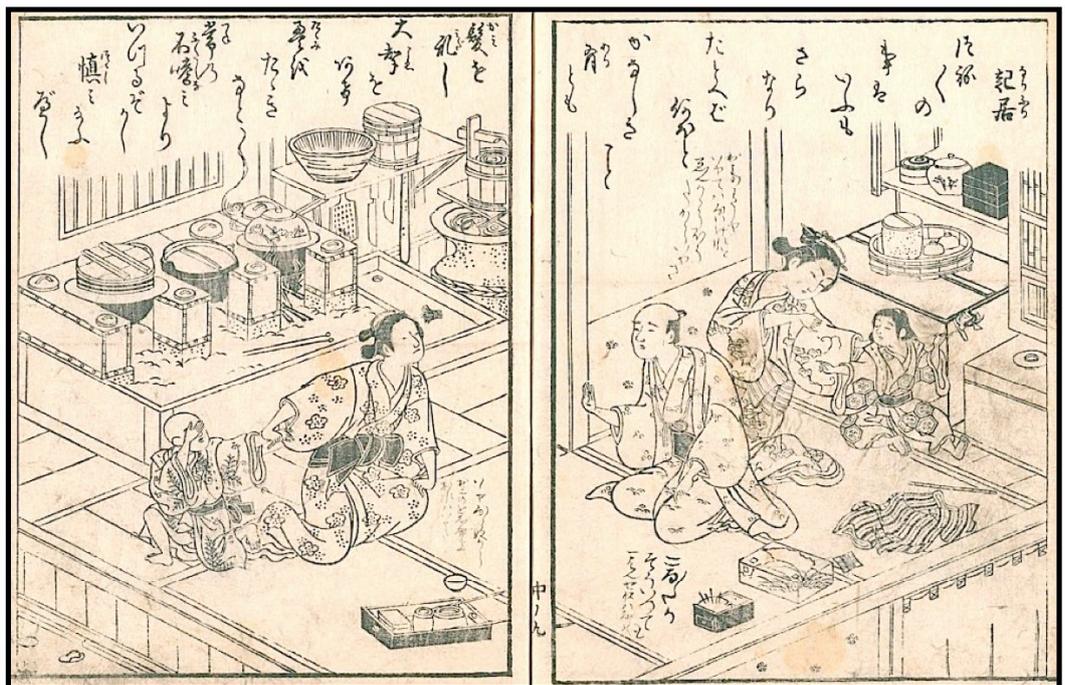
「絵本江戸紫」にへっつい（竈）がいくつも並んだ大きな台所の様子がうかがえる図が2つある。この本は、女性の化粧・服装・生活態度の教養書のたぐいで、画工の石川豊信が、町家の台所から幼児のおもちゃまで細かく描いている。文は、鈴木春信と組んで何冊か絵草子を出している浪花禿帚子。

最初の絵は、本屋の表と奥が描かれている。店は表通りに面し、左側の横道に面した裏の部屋で、女3人がおしゃべりをしている。奥の板間には、3つの焚き口のある大きな竈がしつらえられている。その台の下に薪が何本か覗いている。竈の右の土間には、水瓶があり、その上に板を渡して水桶が置いてある。頭上部の詞書には、言声（ものごえ）と題して、女の姦しさを戒めている。



言声 女の声高に 物かずおほく いふ中にはやり詞 遊女めきたる たわむれに 人のよしあし
つくり声などは 心ばえ 見おとり せらるゝものから つゝしみ たまふべし
絵本江戸紫 中ノ二 (国立国会図書館デジタル化資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2575201?tocOpened=1> より)

次の絵には、大きな町家の台所が、より詳細に描かれている。左側の板間には、3つの焚き口がある竈がすえられ、それぞれにタイプの違った釜や鍋が掛かっている。右端の焚き口にだけ火が入っているようで、竈



起居 つねつねの 事はいふも さらなり たとえ何ほど かなしきこと 有とも
髪を乱し 大声をあけ 畳をたたきなど 常の不嗜みより いづるぞかし 慎みたまふべし
絵本江戸紫 中ノ九 (国立国会図書館デジタル化資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2575201?tocOpened=1> より)

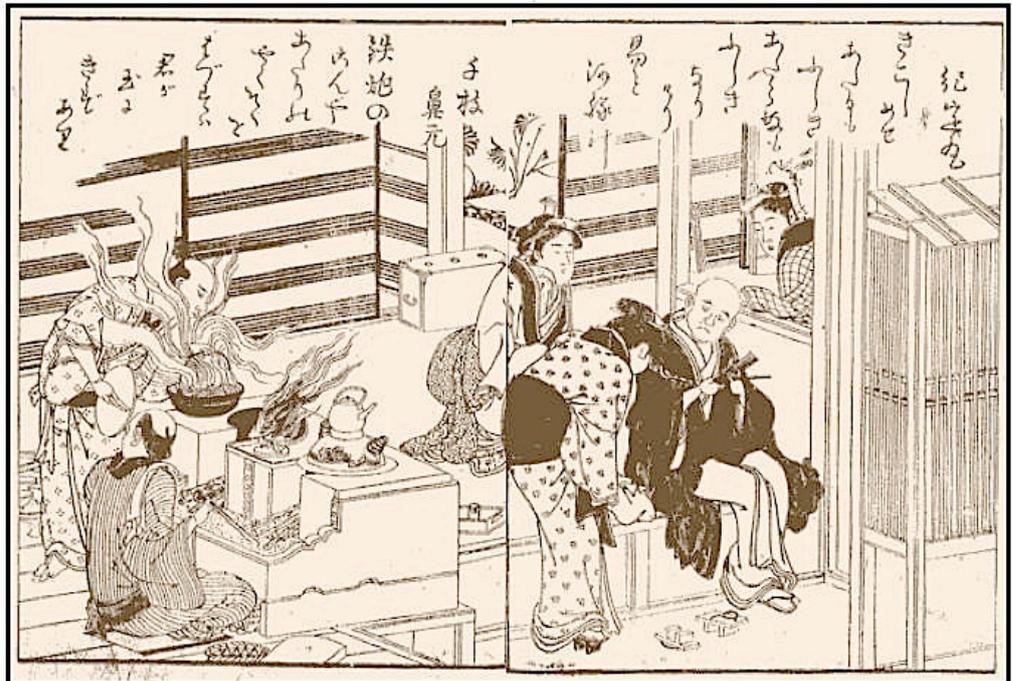
の下には灰がたくさん溜っていて、火鉢が横たわっている。奥の棚の上には大きな播鉢とお櫃らしきものが載っており、その下に、これまた大きなおろし金と包丁が2つ架けられている。その前に水を張った甕があり、最初の図と同様に、その上に板を渡して、水桶が置いてある。

右側の三畳の畳み部屋では、おもちゃを取られた子供の母親が怒鳴りこんで来たようで、父親が相手をし、母親は、子供におもちゃを戻すように説得している。

詞書には、普段はもちろん、たとえどんな悲しいことや腹立たしいことがあっても、髪を振り乱し、大声を上げ、畳をたたくようなことをするのは、普段の心がけが十分出来ていないからである。くれぐれも慎んでいただきたいものだ、というような女の嗜みを説いている。

最後に、料理屋の調理場を描いた例として河豚汁屋の店内の図を掲げる。これは江戸後期の浮世絵師、喜多川歌麿が絵を描き、それに宿屋飯盛撰で二十五首の狂歌を添えた絵双紙「絵本詞の花」に載っている一枚である。

店の奥の調理場の竈の前に二人の男が描かれている。



紀定丸 きこしめせ あたるも ふしぎ あたらぬも ふしぎなりけり 易と 河豚汁
千枝鼻元 鉄砲の こんや あたりの やくそくを はづすハ 君が 玉に きずあり
喜多川歌麿画「絵本詞乃花」(東北大学附属図書館狩野文庫より)
http://dbr.library.tohoku.ac.jp/info/lib/user_contents/kano/05-001066/05-001066i015.jpg

立っている方が、湯気が盛んに出ている鍋のふたを開けて河豚汁の炊き具合を見ている。その横の板間に正座している男が、火箸を片手に心配げに横をみている。もう一つの焚き口には火の勢いはなく、薪も燃えついているようだが、何か飲み物らしきものが暖められている。

右側の店先には、袈裟姿の坊主が腰をかけている。横で女中風情の女が頭を下げている所を見ると、今しがた河豚汁を食したのだろう。ちょっと心配顔にみえる。その上に、紀定丸の狂歌「きこしめせ あたるもふしぎ あたらぬも ふしぎなりけり 易と河豚汁」が書かれている。一方、左側のうへには狂歌作家千枝鼻元の「鉄砲の こんやあたりの やくそくを はづすハ君が 玉にきずあり」という、たいへん分かり難い狂歌が書かれている。

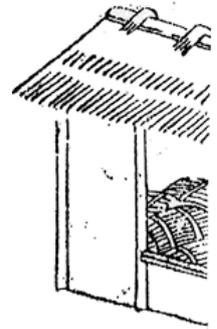
鉄砲汁はフグを調理した汁、即ち河豚汁のことで、大阪では「当たると死ぬ」という洒落から河豚を「てっぼう」と呼ぶ。最下級の遊女を置く店を「鉄砲見世」といい、鉄砲見世の玉(遊女)は梅毒感染の危険性が高く「毒にあたる」ことを詠んだもんだらう。おいしい河豚料理は喰いたいが、中毒の危険があるので、食うことをためらう、転じて、やりたいことがあるが、決行をためらうということらしい。これが生臭坊主の心境か。

世話物「与話情浮名横櫛」に

『この家のものは、竈（かま）の下の灰（へーえ）まで、おれのものだ』



という有名な科白がある。家のものすべて、竈の下に溜った灰まで自分に所有権あるという意味のおどしの文句であるが、実際、竈の灰にはそれほどの価値があった。灰を売れば何がしかの現金収入になった。竈の下にいくら灰は溜められないから、普通の家では、箱やかますに入れて保管した。住み込みの奉公人が大勢いる店や銭湯などでは、毎日大量の灰が出るから、灰小屋（右図）という専用



の物置に保管しておき、灰買いがくるのを待った。灰買いはもっこを天秤棒にぶら下げ担いで、得意先を巡回して、灰を集め、仲買人の所へ持っていった（左図）。さらに灰問屋が集まった灰を引き取り、需要家に売って大儲けした。川越などにはその灰を取引する定期の灰市も立ったという。

井原西鶴の「好色一代男」のモデルは灰屋（佐野）紹益で、彼の親の紹由は、室町時代末期に、灰を大量に集めて藍染め用に売ることを思いつき、江戸時代初期に巨万の富を積んだ人物である。その子の紹益も家業を発展させ、芸術家としても名声を博した。

灰にどんな需要があったか、詳しくは小泉武夫著「灰の文化誌」（リプロポート、1984）に譲るが、主な用途を列挙すれば、カリ肥料、酒造の直し灰（酸味の中和剤）、製紙でリグニン タンニンなどの不純物除去、絹繊維のセリシンの溶解、麻糸製造での繊維軟化剤、染色での色素抽出剤、溶解剤、媒染剤、窯業の釉薬、洗剤、金属精錬での灰吹き、わかめの灰乾燥、生臘の漂白剤、漢方薬の材料、食品保存剤、火鉢の灰、等々である。

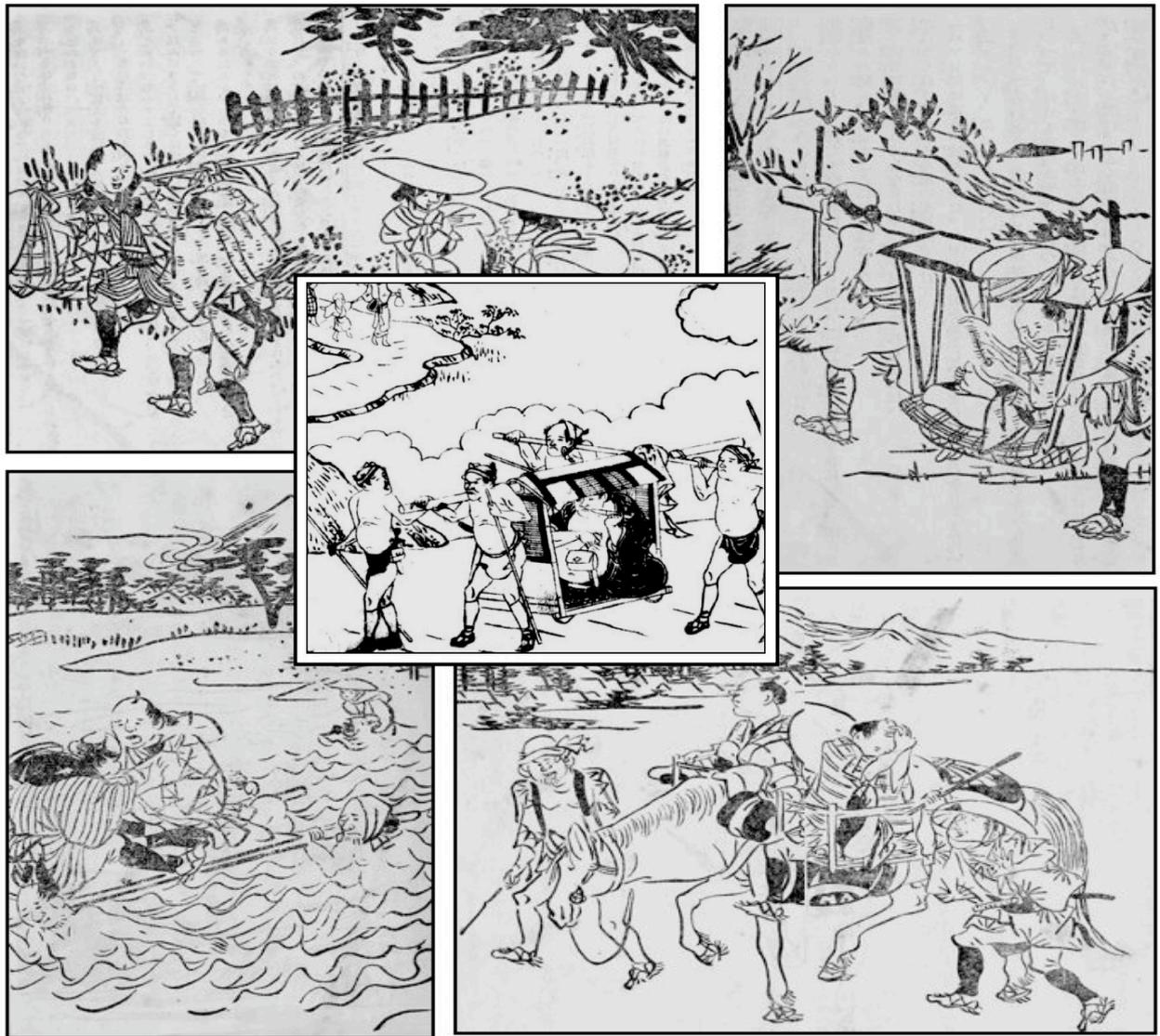
だいぶん横道にそれだが、大量のエネルギーを使う化学産業が勃興し、ついに、1935年に尼崎の木灰屋の大手大嶋嘉兵衛が暖簾を下ろし、灰屋は消滅した。京都市内でも、大宮松原上がった所に、「灰廣」という屋号の建設業社あったようだが、「灰屋」から転業された店ではなかっただろうか、と長年気にかけてきたのだが、ご存知の方はありませんか。脱線ついでに、きょうび、火鉢や囲炉裏のために木灰は何処で買えるのだろうか。ネットで探せば1リットル当り 500 円くらいで、簡単に手に入ることが分かった。『火鉢灰はアマゾンでお急ぎ便なら当日、翌日お届け可能』とか『3.11 原発事故の放射能の影響を受けていません。産地証明書付き枕崎の木灰』等々。

自分の脚で **旅して** わらじを捨てる

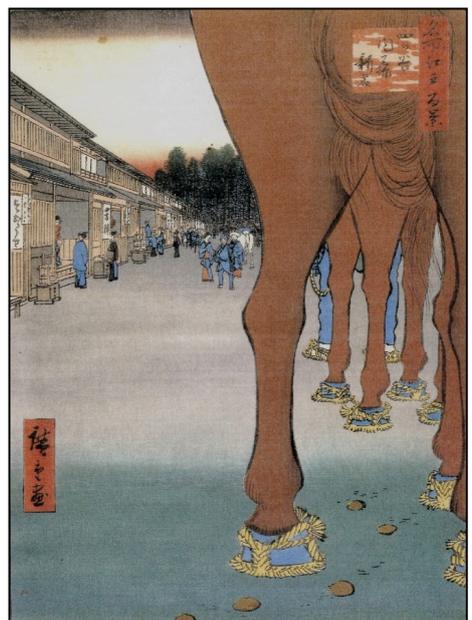
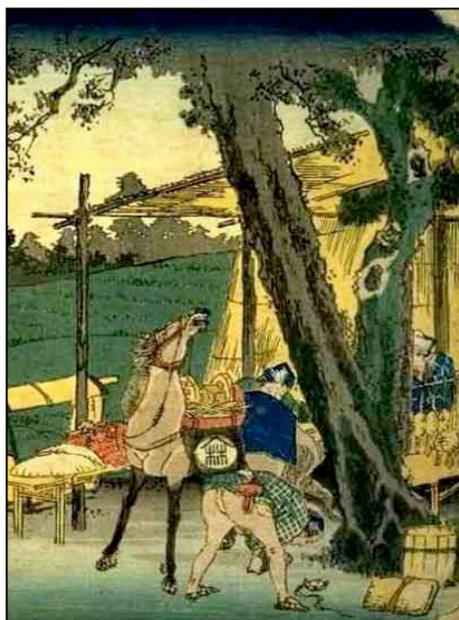
電車や自動車や飛行機が運んでくれる現代と違って、何処へ行くにも、自分の脚がたよりであった。東海道五十三次は三条大橋から日本橋まで 490km、125 里で、この距離をひたすら歩いた。籠や馬に乗ることもあり、伊勢湾を船で渡ることも、大井川を雲助に担がれて渡ることもあったが、こういう乗り物は、あくまで補助手段で交通の主力は自分の脚である。このような徒歩旅行者が、どのくらいのエネルギーを消費したのか。一日 2000 キロカロリー必要だとして、石油換算で 3ℓ と見積もった人がいる。意味があるかどうか知らぬが、20ℓ 以上必要な自動車とくらべて下さい。

弥次さん喜多さんの東海道中膝栗毛から、当時の旅姿を眺めてみよう。

歩く姿は、草鞋履き、馬には 2 人乗り、籠では 1 人を 2 人で担ぐ、重い人なら 3 人で担いだ（中央図）。雲助の肩に担がれるだけでなく、2 人で板に乗って 4 人で担がれることもあった。歩くのに草鞋（わらじ）を履き（右下）、すり減れば捨てて、新しいのを取り替えた。京都に着くまでに、何足もの草鞋が消費されたことだろう。



馬も草鞋を履き
 (広重「名所江戸百景 秋之部 四ッ谷内藤新宿」)、途中で新しい草鞋に履き替えさせた。人間なら一足で50キロくらい歩けたが、背に客や重い荷物を載せて歩く馬の場合は、4,5キロ毎に古いのを捨てて新品と交換したという(英泉「木曾街道六十九次 板橋之驛」)。



次頁の「江戸名所図絵 卷之二」の品野坂の境木の図に、茶店の側の松の高木のたもとに、すり減った草鞋が、うずたかく積まれているのが見える。

イサベラ・バードは「日本奥地紀行」に次のような観察を残している。

『馬の通る道は、捨てた藁靴が散乱し、子供たちは、これらを拾い集め、積み重ねて腐らせ堆肥とする。』（高階健吉訳、東洋文庫）

また、シーボルトも『江戸参府紀行』でも

『街道でしばしば旅行者が落としたり捨てたりした藁靴の山をみかけるが、集めて肥料にするのである』（斎藤信訳、東洋文庫）

と書いている。草鞋は藁を木槌で丁寧に叩き、繊維を軟らかくしてから編まれているうえ、旅する人や馬が踏みつぶしているから、ますます密度が高くなっていて、良質の肥料の原料となった。



おわりに

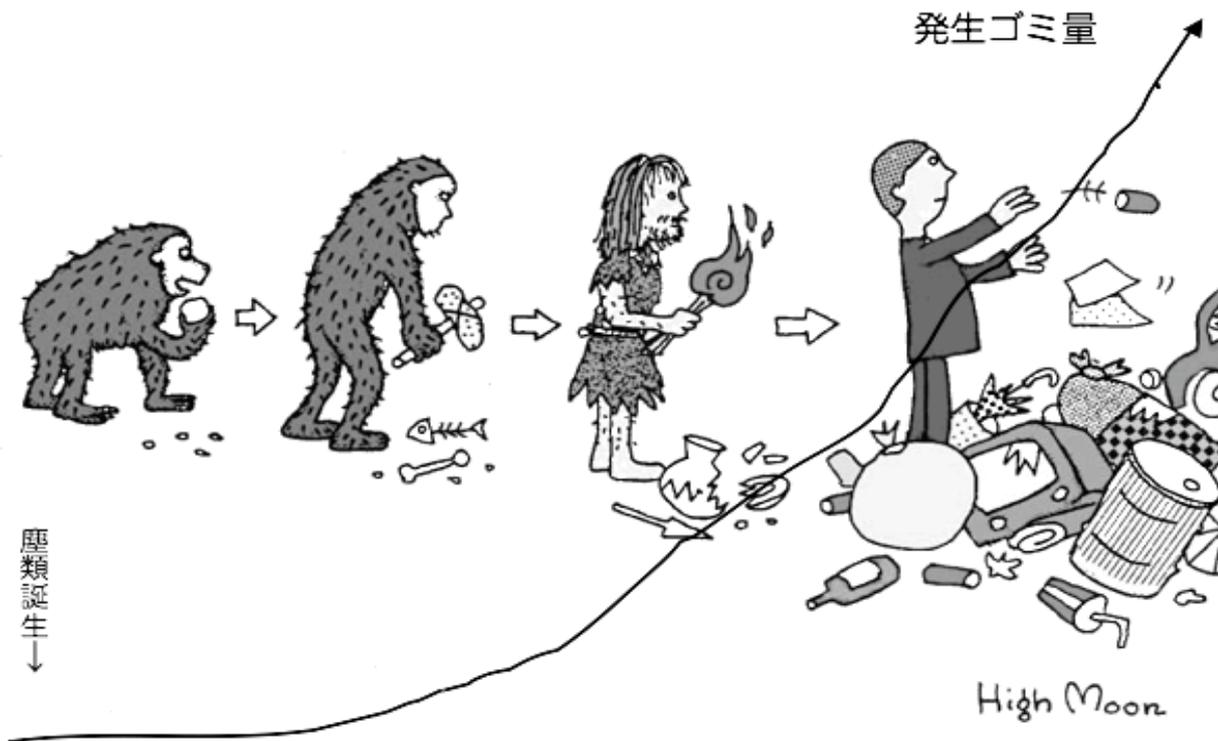
基本的に人間のエネルギーに頼っていた江戸時代でも、大勢の人が集まって、一人ではお及びも付かぬことも仕出かしていた。人を集め、組織し、強制する社会システムが、ちゃんと確立していた。農業や漁業、鉱山仕事、山仕事に多くの人間が組織され、身を削って一生働いた。ここで見て来た日常の暮らしでの個人的な長閑な生活の背後には、このような過酷な現実があったことを忘れてはならない。一概に、日常生活の場でエネルギー消費が少ないといって、理想化出来るものではない。江戸時代の労働の姿は、またの機会に譲る。

現在、私たちは、大量の化石燃料を消費するさまざまな機械のおかげで、厳しい労働か

ら開放された。これはありがたいことである。しかし、行き過ぎてはならない、電動歯ブラシで歯を研くなど持つての他である。程々に留めておくべきである。どの程度までかを決めるのは難しいが、今は行き過ぎてしまったと云える。冒頭に掲げたグラフが、そのことを如実に示している。では、何を削るべきか。

とりあえず、今の機会に、原子力発電を削るのが最善だ、と筆者は考える。なぜなら、最もリスクが大きく、史上最悪の廃棄物を生み出し、処理処分出来ぬままに残すはめとなるからである。しかし、肝に銘じておくべきは、原発の電気を削る変りに、代替エネルギーを開発したのでは、何も変わらない、ということである。江戸時代の長閑な日常生活の側面のみを見ながら、今の半分のエネルギー消費で、どんな日常生活となるのか、想像するだけでも楽しいではないか。あわよくば、試すくらいはできるのでは。そして病み付きになれば儲け物。一ヶ月の電気代+ガス代+ガソリン代が、半分になり、ついでにゴミ袋代も半分になるというおまけもついてくる。

バイバイ原発、バイバイババチイゴミも！
エネルギー大量消費は、ゴミの大量生産です。まさに塵類の歴史を物語っています。



参考書目

菊池貴一郎

「江戸府内絵本風俗往来」(1971)：明治 38 (1905) 年、東陽堂から刊行されたものの覆刻版で、青蛙房から出版された。著者については何も知られていない。市井の好事家であったという。

石川英輔著

「大江戸エネルギー事情」(1990)、「大江戸テクノロジー事情」(1992)、「大江戸リサイクル事情」(1994)：原子力文化財団の PR 誌「原子力文化」に連載されていたものを加筆・訂正していずれも講談社から刊行された。

同じ著者の最近の著作としては、月刊誌「歯医者さんの待合室」に連載されたのを単行本にした「江戸っ子は虫歯知らず？ 江戸文化絵解き帳」(2012.7)がある。

三谷一馬

「江戸商売図絵」(1995)、「江戸年中行事図聚」(1998)：いずれも中公文庫に入っている。前者の初版は 1963 年。文庫本に入っているのは、1986 年刊行の立風書房版。後者も 1968 年刊行され立風書房から刊行されたものであるが、文章に大幅な加筆訂正がなされている。

渡辺信一郎

「江戸の生業事典」(1997)：1976 年刊行の「川柳江戸行商」(上,下)と川柳関係の雑誌に連載された「えどの生業」関係の記事をベースに事典として、東京堂出版から刊行されたもの。

根本順吉

「江戸晴雨攷」(1993)：雑誌「江戸っ子」に連載されていたのが 1980 に単行本化され、13 年後に中公文庫になった、そのあとがきで、気象学者の著者は、

「『江戸晴雨攷』においても、今後さらに気温は低下してゆくことを予想して書かれた部分もすくなくない。ところが、この予想は全く外れた。八十年代に入り、特に後半から、世界の気温は未曾有の高いレベルに上昇していったのである。」

と書いて、その因は炭酸ガス増加による温室効果だけではない、想定外の太陽活動の活発化による所が多いと弁明している。

三浦隆夫

「都のべからず物語」(1995)：京都新聞夕刊に連載されたもの。京都奉行所の町触れのなかから、町民生活が浮き彫りになっているものを、分かりやすく解説した。

図絵類

「東海道中膝栗毛 全」(有朋堂書店, 1930)

「東海道名所圖會」(吉川弘文館, 1910)

「江戸名所圖會」(有朋堂書店, 1927)

「拾遺都名所圖會」(日本随筆大成刊行会, 1928)

「都林泉名勝圖絵」(講談社学術文庫版, 1999)